

# こどものくに —ハロー!みらいくん— Children's Land : Hello! Mirai-kun

## キーワード:

未来  
ロボット  
子どもの活動  
認知  
プロダクトデザイン

## 抄録

2019年5月3日(金)～6日(月)  
グランシップ6階展示ギャラリー  
主催:公益財団法人静岡県文化財団、静岡県  
監修:長橋 秀樹(常葉大学教育学部)  
川原崎知洋(静岡大学教育学部)  
山本 浩二(常葉大学造形学部)

令和元年を迎え、新しい時代の幕開けとして今年度は「未来」というテーマが設定された。これまでのこどものくにのテーマは「海」、「動物」、「色」など視覚的又は具体的に認識しやすい要素のものが多かったが、今回は時間という概念的な要素を含む「未来」というテーマをどのように具体化するかということについてまず話し合うことから始めた。例年開催期間中の学生ボランティアには静岡大学、常葉大学、静岡英和学院大学、東海大学など県内の様々な大学、高等学校、専門学校から多くの参加があるが、今年度は一部の学生に企画段階から関わってもらい、彼らのアイデアを実現化することを一つの目標とした。

企画の主旨設定として「未来」という言葉から想起されるテクノロジーやそれらを駆使したバーチャルリアリティ、あるいはインタラクティブなアート表現といった方向性ではなく、あくまでもアナログな手法で「未来」を表現していくということとなった。加えて、時間軸的「未来」について、遠い先の未来とほんのわずか先の未来とに分けてアイデアを設定した。遠い先の未来については現在まさに進化しつつあるロボット工学とAI技術によってもたらされる人類とロボットとの共存というテーマに絞り込み、子ども達にとっていずれ仲間や家族の一員となるロボットについて思いを巡らせる活動とした。また、ほんのわずか先の未来をテーマにした会場では子どもたちの日常にある様々な生活用具の中で未来として捉えることができる部分を赤色で示すことで、これから先に起こることを想起させるような展示内容とした。

また、「未来」をグラフィックデザインとしての要素として捉え、ひらがなフォントのエレメントを分解してスタンプを作り、それらを使って自分の名前を再構築しながらスタンプするという活動も行なった。

その他、子どもの成長に応じた手の高さを壁面に表示し、自分自身がこれから成長していくという未来を感じさせるアトラクションや、無限の可能性を秘めた子ども達自身が未来という人生の舞台を生きる主役であるということを象徴する写真撮影コーナーも設けた。

## ① “みらいくん” こんにちは！

今回のこどものくにでは様々に変化し続ける未来のイメージを象徴するキャラクターとして「みらいくん」を設定し、全てのコーナーでの案内役兼説明役とした。「みらいくん」はひらがなの丸文字をベースとして擬人化し、赤い色で彩色されている。み、ら、い、それぞれの形に同じ目のデザインを施すことで変幻自在の存在であることを示し、赤い色が今回の展示におけるテーマである未来を連想させるという仕掛けになっている。導入のための部屋では立体化したみらいくんが来場者に語りかける形で未来について、会場全体について説明するように壁面に吹き出しを表示した。展示室の壁面と床面を赤の水玉で埋め尽くし、動的な印象と赤色のイメージを強烈に表現し、子どもたちを不思議な未来へと誘う仕組みを施した。(写真1)

次の部屋は対照的に床面も白一色として静かでニュートラルな空間とし、そこに日常におけるほんの少し先の未来を表現するオブジェを展示した。少し概念的ではあるが砂時計や蚊取り線香などは過去としての砂、灰に対してこれから変化していく「ちょっとさきのみらい」の要素を赤に塗ることで子どもたちに過去と現在、未来について考えてもらうという内容である。サイコロの場合、6つの数字のどれが出るかわからないということで全ての目が赤になっている。また、折り紙は折り線を赤で表示することで一枚の紙から折り鶴に変化していくことを連想させている。(写真2、3、4)

## ② みらいくんにタッチ&ステップ！

このコーナーは子どもの身体運動を誘発する仕組みを施した。子どもの成長に応じた手を伸ばした時の高さを手形で壁面に表示し、現在の自分の高さ、これから成長した後に届くはずの未来の自分の姿を想像してもらうという体験コーナーである。届かない手形を一つの目標として、ジャンプして触ろうとする子どもの姿が多く見られた。床面には足形を並べ、大人の歩幅を表してそのあとをなぞるように歩いてもらうように誘導した。これらの手形、足形も赤く塗られ、みらいくんの目がつけられている。(写真5、6、7)

### ③ みらいファクトリー

2048年には、人間の数とロボットの数が同じになるというイアン・ピアソン氏の予測をもとに、未来の人間とロボットのあり方を考えることを前提とした空間作りを行った。展示室全体をロボット工場と設定し、発泡スチロールのパーツ（焼津市のスチロール業者から無償提供された）から将来の友人、あるいは家族となるかもしれないロボットを制作してもらった。

接着は安全性を考慮し基本的にスティックのりを使用、負荷がかかって接着しにくい場合に限り学生スタッフが爪楊枝を配布して子どもの活動サポートし、問題を解決してゆく。出来上がったロボットはひな壇に並べたりトラスに吊ったりして空間を埋めていくような展示とし、互いに作ったものを鑑賞し合う場面設定をした。

4日間の会期中1日に2回、発砲スチロールで出来た着ぐるみロボットが登場して子供達と遊ぶ時間帯も設けた。展示室中央には高さ5mの巨大ロボットを制作し、その目がみらいくんと同じデザインとなっていてみらいくんがロボットにも忍び込んでいることを示唆する。このロボットは原型デザインを常葉大学造形学部学生が担当した。また、同空間には乳幼児をもつ家族が安心して活動できるよう発泡スチロールの積み木での遊び場を提供した。（写真8、9、10、11、12）

この企画の中で展示室の状況設定を説明するため「みらいしんぶん」も制作した。これは将来生じると予測されるロボットと人間の関係性についての諸問題を、子どもにもわかるような絵と文で構成したもので、会期中毎日発行という形にした。この原案も常葉大学学生の発案によるものである。（図1、2、3、4）

### ④ 「み」「ら」「い」でつくろう

川原崎知洋先生（静岡大学教育学部 准教授）と同大学院生によるスタンプコーナーである。ひらがなのエレメントを分解してスタンプとし、それらを使って自分の名前を押してもらった。反省点として、インクは様々な色を準備したが、作業の過程で色が混ざることが多く、後半は発色を維持することが難しかった。できた用紙は学生スタッフが壁に並べて貼り出していった。（写真13、14）

### ⑤ みらいへのステージ

最後の部屋も壁面全体を真っ赤にして、導入の部屋との共通性をもたせた。壁面にみらいくんの目とセリフを張り出し、空間全体としてのみらいくんに包まれているような格好である。出口近くに赤いカーテンで飾られた舞台を作り、子どもたち自身が未来そのものであるというメッセージを読んでもらい、記念撮影をする場として制作した。（写真15）

素材協力：株式会社メナック



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7





写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



図 1



図 2



図 3



図 4





写真 13



写真 14



写真 15